昭和十九年十二月七日発生

東南海地震体験談集

昭和五十九年十二月

尾鷲市総務課収録

はじめに

昭和十九年十二月七日に発生した「東南海地震」は尾鷲市で六十五名の死者を出すと言う大きな被害を出した。なかでも地震直後に発生した大きな津波によって多数の尊い人命が失なわれ津波地震の恐ろしさを再認識させる結果となった。

尾鷲市ではそれより九〇年前の一八五四年（安政元年）にマグネチュード八・〇と言う大きな地震があり一七〇人にのぼる死者を出している。

昭和十九年から四〇年を過ぎて当時の体験者も少なくなっており、当時の貴重な体験を後世に伝えるために、数少ない体験者の方から聞きとってここに一冊の本としてまとめた。聞きとりは、録音テープで各個人に一人一人聞き、それをそのまま清書したものであるため文体上不備な点が多くみられると思いますが、その点はお許し願います。生の声を出来るだけたくさん伝えたいと言う一つのねらいがあるため

おわせ弁をそのまゝ使用しています。最後にこの調査に御協力をいただいた多くの方々に深甚から御礼を申し上げます。

地震の概要

昭和19年12月7日、13時35分頃に遠州灘及び熊野灘の沿岸は大規模地震におそわれた。

震央　東径136°37′　北緯33°48′
震度　尾鷲 5　津 6
マグネチュード　7.9
震源の深さは極めて浅く10数Kmと考えられた。

被害　死者　尾鷲38人　九鬼早田4人
南輪内23人　計65人
流失家屋　尾鷲531　須賀利14
九鬼早田57　北輪内25
南輪内191　計818

市内の津波の波高　尾鷲6m　九鬼5.4m
早田5.3m　三木浦4m　三木里4.5m
古江2.7m　賀田9m　曽根5.3m
梶賀4.5m

浸水高（地上高）天満　永井鉄工所　3m43cm
北浦　山城酒屋　1m20cm
〃　金剛寺　83cm

中井町	吉屋	90cm
〃	垣内薬局	38cm
栄町	明慶タバコ店	82cm
朝日町	内山龍夫	1m66cm
〃	小川洋服店	1m80cm
林町	水産試験場	2m82cm
〃	浜権太郎	2m16cm
〃	長谷川正平	59cm

各年の地震回数	有感	無感	計
昭和17年	6	57	63
〃 18〃	10	237	247
〃 19〃	69	1290	1359
〃 20〃	67	1436	1503
〃 21〃	51	767	818

避難した場所

新道　八幡社社　宮ノ上小　現在の尾

鷹高校　中村山　尾鷹小　瀬木山など

尾鷲市林町

大倉周岩（当時40才）

地震のときは自宅におりました。昼食をすませて外に立っておった。そーたら地震がよってきた。昔は各戸で用水桶をおいてあった。それに入っていた水が震動によりザザーツと零れるぐらいの厳しいものであった。私は地震の予感がしたので、知古町へ行っていた子供たちに津波がくるかわからんよって進備しておけといって家に帰った。そーたら地震から17分くらいで津波がやってきた。昔から地震のあと津波のくるまでの時間は、ご飯を炊くひまがあると聞いておったが、あのときは早かった。新町の方から津波がくるとおめいてきたので、家内と姉の子に裏の畑へ逃げとれといって、食糧と身のまわりのものを持たーた。私は警防団第4分団の分団長をーておったので、家にはおれないのでそのまま本部（当時役場）へ走ったのです。それから町内を巡回せよということで回った。何回目の津波かわからないが、長谷川

さん宅と吉田氏宅と一メートルちょっとの空地があったが、そこから潮が吹いてきた。仲ときこさんがとなりにおったが、街を逃げたら危険やで本家を通って中村山へ逃げよと指示したことをおぼえている。林町は今の小島たばこ屋あたりまで来たと思う。林町十番一号あたりは海水でいっぱいで、岳詰工場（現在中山冷蔵第二工場）があったがそこの表やしょうゆうのたるが、この家の裏まで流れて来ていた。私の裏座敷ではタンスの引出しの一段くらいまで海水がきた。この家は道にのった程度であり、私の家の内庭では五寸くらい水が入った。新町は低い関係で今の山崎米屋さんの前に一丈くらいの高さにごみが道につまっておって、私はそれをのりこえて浜へ出ていったおぼえがある。念仏寺のところを通ったら、念仏寺の北門のところに小さいてんま船が浮いておった。

丸三のところが細い道で、そこらにもドラム缶がごろごろしておった。あとから調べたんですが、船が大小あわせて五十三隻あがった。

高町は奥保の倉庫になっているところの、内山という人のところまで舟があがっていた。尾鷲製氷（現在石川商工、港町四番八号）に南丸（早田の舟）が米を積んだままのしあげていたので、それの警戒に夜警団が出た。米を盗みにくるので、缶詰工場の冷蔵庫も相当にいたんだ。警防団が出てやった。町々の角に立って夜警をした。津波のあとかたづけも警防団が出てやった。一番困ったのは食糧で、警防団の団員にご飯を食べさせんなんので、後場からはあまり出ないし、手弁当みたいなかっこうで出た。くりやは新川原町におって、あの当時缶詰を仕入れていたんでしょうか、それが流されて北浦の橋の下に缶詰がようけ積んでおった。それをあっちの分団の人が拾いに行ったと聞いている。

旌地増三さんは昔町会議員をしたことのある人で、浜の方に住んでおったが、波に流されて屋根に乗って北浦の橋のところまで来た。あの時の死者は川原町、新川原町でだいぶ出たと思う。警防団の自動車で今の電源の方へ焼きに行った。一度死体をおさめて、寺から焼きに運

んだ覚えがある。家を出てから警防団の仕事で一ヶ月ぐらい帰えらなかった。物を盗にくるのが多いので、町々の入口に警防団員を配置して夜警に当った。今回いような津波がきたら、相当海水につかるんじゃないかと思う。地盤が沈下したように思う。国市に石地蔵があって入口に神様があり、それをずうといくと本家の製材工場があった。その工場は満潮の時でも通れたが、地震のあとは海でびーやびーやになっていた。

尾鷲市朝日町九番二十号

吉沢一男（当時32才）

引本造船所に勤めていた。地震のおこったときは、舟と舟との間におった。舟がゆするので危険に思い浜へ逃げた。浜で立っておったら砂浜へ足がめりこんでいくように思って、板の上に立っておった。引本を見たら土煙が立昇って、家が倒れていくのが見えた。その前に須賀利に爆弾が落ちたので、また何処かえ爆弾が落ちたのかいなと思った。

事務所の方から道具を片付けて家に帰りなさいという命令があったので、家に帰るため長浜の市場のところにきたら、津波がきたぞとおめいてきたので、私らは津波がどこまでくるんやらわからんし、初体験じゃもんで長浜の家の間を通って山の上にあがった。そーてみいよったら潮が段になってずうっとくるんさね。あれが津波かいなと思った。岸につないである船が丸太を積んでいたが、波がくるともち上って石

堤防の上にのって、潮が引いたら舟が倒れて、九太が海の中に落ちた。それが何回かあかいったりきたりしている間に、おさまったもんで家に帰えろうかということで、引本の町は通れんよって山を越えて、浦へおりて、渡船の橋を走ってわたって旧道を通ってきたが、大きな石がようけ道へまくれておった。そこを通って屋鶴まで約一時間で来た。その途中伊勢新聞の派遣で坂田さんに桜茶屋のあたりで会ったので、何処まで行くのかと聞いたら本社まで歩いて連絡に行くといっていた。北浦の橋のところに来たら、道の上に魚がいっぱいピチピチやっていた。皆恐しいので拾う人もいなかった。家に到着したが誰もいないし道端にごみがいっぱいあるし、サツマイモがころころしているが拾い手もいない。家族の逃げたところが見当がついたので、そこへ行ってね、そこで一週間ぐらいとめてもらった。

他人の話では一番最初津波の来るときは、堤防の内側の底が見えたそうです。うちのおばあちゃんの話では、私達子供の時から津波は地震

がよってから、ご飯をたいて食べて、それを弁当にもって逃げられるだけ時があったと言っておりましたが、15分～20分で津波が来たように思った。

おばあさんはこんな地震におうたことはないと言うし、防火用水はたてこんぼうってとるし、隣のおばちゃんとモンペはくやら騒動しよったら、瀬木山に見張所があってあそこからおめきこんみよるもんで、何やろと思ってこっちへきたら、津波じゃやて言うんで浜の方を見たら山口さんの下の方にうどん屋があって、そこに大きな波が来てその家がつーフと倒れていくんで、恐ろーきってって姉はおひっもって逃るし、おばあさんは米をもってきたらお父さんはおらんし、本家の中庭を通っておひつと米をもって中村山へ逃げて皆なつーつー泣きよるし、津波のあと家に帰ってみたら海岸の方は家も船もブーチャであの時は、船で家が倒されてた。私の家の勝手口から海が見えた。店は水につからなかったので警防団が来て浜の方の人におにぎりを配った。

尾鷲市朝日町

山口　みよ子（当時40才）

私は十月に四人目の子供を出産したばかりで、昼ご飯を食べて前の北村さんとこが常会長をしておったので、そこでタバコをわけていたとき、地震がよってきた。

北村さん家の前の家におじいちゃんが居て、そのおじいさんは地震にやしょうと言うて外へもようでやんし、子供を抱いて入口のガラス戸を持っておるし、地震がやんだので家に帰ったら棚のものはみな落ちているし、洗濯物も落ちているのでそれを拾っていたら、おとうさんが帰ってきて、地震がよったら津波がくるかもわからんでと言うので、津波らきやへんわいていいよった。長男は幼稚園で、妹は三才、長女は八才、それに生れたばかりの子、その時は瀬木山に敵機が来たとき知らせる半鐘があって、何かあると鳴らしておった。その時もカンカンと鳴らすので敵機がきたんやないかと言っておったら、外は浜から

逃げる人でいっぱいになってきたので、どしたんどなっていったら津波やって言うんさ、隣の人は米を持って逃げるし、めたーらーめしをもつのに手いっぱいで米どころでない、子供はおらんので捜さんなんし、そらの方へ早よいっかいって石やさんの方へ逃げた。姉の子は配給のタバコをもたして新川原のしいちゃんへいかしたが、新川原町の人々は津波はくるっていってだれもおらんと言って帰って来た。それで長男と二女は小学校へ行っていると言うので石垣へ行ったら、石垣にはだれもいなかった。学校へ皆んな逃げたと言うので、学校へ逃げたら今度は中村山へ逃げなあかんと言うので行ったら、ようけおって今どこどこは流れた、新町は流れたと聞くがよう見やなんだ。新町の下に幸運丸があってそこまで波が来ていたが、それから下は皆んな流れた。

しとかあ中村山におったが、学校の運動場へ行けと言うので学校へ行ったら、運動場はいっぱいでどこどこの人は死んだ、どこどこの人は

死んだと言うて、これはえらいこっちゃ、夕飯はどないなるんやろと言っていたら、にぎり飯をくれるんやっていと言うので学校に皆おった。津波もとまったと言うので家をみに行ったが、警防団の人が見張っていて入らしてくれへんし、道はダンプカになっているし、梯子のようなものをつかってそれを越えて家は流されていなかったので、屋根から下りて衣類をもたなあかんと言うので衣類を持ちに行った。幸い潮はタンスでわかったが下から一メートルぐらいの高さまで来ていた。その前に子供を捜すのに騒動した。子供等は上へ逃げたと言うので、どこまで逃げたんやろと聞いたら、旧女学校の方の竹藪へ逃げたとのことであるが、北村道生さんと子供らは新町の方に帰って来ていたが、途中高町の人達に会って今家に帰ったら危ないと言うことで、その人達といっしょに段々畑まで逃げたそうで、しばらくして子供達ははんじへ石垣へ帰ってきた。新町では、長屋のおばさんが一人死んでいるか、その人は米を持って逃げなのに逃げおくれたんやろな。

裏の人でおいしいさんとおばあさんがいたが、米俵を背負ったまま死んでおった。新町方面は船は入ってこなんだけど、いろんなごみやドラム缶、丸太などがようけ町の中に入ってきた。

東　新一（当時32才）

尾鷲漁協経営の大敷網へ行っておって、昼めーをくって国市が白砂青松というか美しいところで、尾鷲造船があってそこで定置網の船を造っておったか、完成したのでそれを下すのに潮時も良いし、私ら若かったので舟の下にもぐって下すよう支度をしいよったら、グラグラとやってきた。長い時間やった。だんだんえろなって立っておれんのやな、特に砂浜はえらかったのか立っておれなんだ。しゃがんで座って皆んな顔色はないし恐ろしむった。地震がやんでから岡さんと言う人が津波のことを知っておって、これやったら津波がくるかわからんで準備をせいと言われたが、津波やってそんな馬鹿なことはあるかいといって皆でワイワイいいながら、そこにあった舟を下すようにしていたか、岡さんはどうもさわいできたで、津波やで逃げなあかんでと言うから、ハッと沖を見たら尾鷲湾全体が温泉のように真黄色になっ

て、向井の下、大曽根の下かどろどろになって押しよせてきた。サァ津波ていうのはこれやそと言うんで、そんなり造船場のとこから倉庫（水試の裏）へ、横に逃げたらあかんそと、津波のときはかならず津波をうしろにおいて逃げなあかん、津波は一度にきて一度に引くもんではない、しめしわきて、それを横切っては足をとられ命を落す。皆にーて逃げたら絶体にすぐかぶってくるもんではないと聞かされて、これは津波やということでそこどこではない。船も何もほっとけということで逃げた。

国市に土井本店の製材所があったが、そこで働いている人も津波のこと知らんのやろな、それで私らは津波やそ津波やそ逃げよといいもて津波と言うものかわか　んなりに恐ろしいものやということで逃げた。水試のところへ行くのに、中川の土堤ぞいに矢浜街道まで行って、それから林に入り瀬木山の北側の道をぬけて倉庫まで行ったときには、すでに水が倉庫まできていたので、危険を感じたので瀬木山へ避難ー

た。瀬木山で津波の状況をみておったが、波が押し寄せてくる、引いていく、一旦押し寄せた波は、船も家もなにもかも浚ってゴチャゴチャにしておいて沖へ引いていく。その大きな波は六～七回あったように思う。三回目ぐらいの波の時、みたら北浦の地方事務所があったがそこまで大型船が流されていた。

北川のはとりはほとんどの家は流されて、新川原町、川原町が全滅した。浜通り、魚市場周辺は全滅した。前の堤防は高くないし波は越えた。当時尾鷲には海軍の基地があって、艦船が配備されていたが、それが波にゆられて、行ったり来たりしていたが、軍艦でもどうしようもないんやろ、錨をやろか何をしようが止まらんのやな、軍艦の上では兵隊が船が沖へ行ったり高へ行ったりするたびに、船尾へ行ったり前へ行ったりワイワイがやがやしておった。

夕方になったら尾鷲湾は家の破れたのやら、国市の木場から流れた丸太、船の破れたのやらでいっぱいやった。

尾鷲市港町（旧新川原町）

浜地　和（当時18才）

地震がよってきたので外へ飛び出したが、屋根から落ちるものがあるから危いというので、浜へ逃げよというので、広場へ行くのに浜へ逃げた。浜のところの日吉丸というのがあって、屋根の棟が二つに割れて、子供を産んだばかりの人が親子でいた。三人が助けを求めておめきよったがな。屋根から土が落ちてくるし、地震がおさまってから下に降りていたが何か知らんけど、家の中流れてしまったがな。地震がおさまってから家に帰えったが、神棚のものは落ちていて針やら上にのせてあったものはみな落ちていたので、それを拾っていた。それで塀をのぞいてみたらチョボ、チョボと音をたてて波がやってきたので、これは津波やと思い弟を背中におんでそんなり逃げたんやけど、この道を西へ走って中井の橋を渡るときは、橋の下は水はなにもないのに波が地下から吹いてきて、渦をまいて赤土になってもうてきた。

それをみたら一ぺんに腰をぬかしてしまって山へ登るのに、ぐんなにして行ったかわからなんだ。新道へ上らないで西の方面へ逃げるとよかったけど、こっちの方が近いと思ったもんでこっちへ逃げたが、橋を渡ったらあかんと言うのはこれを言うんやろなあ。

皆近い山へ逃げよとするやり。昔の津波は、地震から一時間あまりあいがあるっていっておったが、二十分もなかった。ご飯を炊く間ら全々あろかい。逃げるとき二階から外をのぞいていたおばさんに逃げるときには、腰まで水がきていた。新川原町あたりは中井は通りまで流れて吉ちゃだけ残った。北浦の方も家全部流れた。逃げるときは何も持たずに下駄をはいて逃げた。一旦宮之上小学校へ行って、宮さんの近くにこころやすい家があって、そこにおいてもうて、一週間ばかりおいてもうてから今の主婦の店のとこにおいてもらった。食べるものは学校でにぎりめしをくれたのでよかった。

寺へ泊った人もあるし、いろいろやな。このへんだけでもようけ死ん

だ。この哀の夫婦とか、又、八幡大橋を渡っていて病人をおんで逃げよって流されたとか、親子で流されたとか、私は親戚の家においてもらっていたが何もなーなので食べるものも遠慮やった。

尾鷲市港町（旧新川原町）

桜木　さとる（当時26才）

地震のときは、自宅におったが広いところへということで浜へ逃げたが、地震がおさまってから家へ帰った。その時は昼食をすませて、いもを買い出しに行くのに、準備をしておった。

昼の列車に遅れたので、夕食を準備しておった。家に帰ったら棚の物は落ちているし、津波が来るかわからないので、米をかしよったら、津波が来たというので、そんなり子供を三人だかえて、新道へ逃げたんやがな。

昔から地震のあと津波が来るまで、ご飯を炊く時間があると聞いておったが、そんなに時間はなく二十分ぐらいで津波が来たように思う。新道から浜の方を見たら、八幡神社のところにあった山本鉄工所の建物が大きく傾いて崩れていった。あれだけは忘れられない。

そうこうしているうちに、日は暮れてくるし泣いていたら、浜の方の

人は皆んな宮之上小学校へ避難していると言うので学校へ行ってしばらくの間おったが、その後、北浦のおじさんのところで世話になった。学校におったときは炊出をしてくれたが、そんなに長くはなかった。

にぎりめし三コとコウコ三ツもうた。

波の大きいのは三～四回ぐらい。あのときは九州の別府温泉へいっとるように思った。ブクブクと潮が川底よりわいてくる。道路に潮がのってくる前にブクブクわいてきた。

尾鷲市朝日町

若葉　治（当時41才）

当時須賀利小学校々長でしたが、地震のときは教室におり、昼食に帰えろうと腰をあげたときでした。とっさの行動は、廊下の片すみに身をふせました。そのあと児童を集めて裏山に避難させ、私もいっしょに裏山に逃げました。津波は校舎がラス窓下敷居ギリギリまできておりました。津波で困ったのは、タタミはだめ、衣類も全部グメ、食料にも困った。家族とは避難する途中逢ったので共に居るよう連絡しておいた。当時は学校に御真影が奉安されてあったので、潮にはつからなかったが、万一を心配して村役場の階上に奉安、村役場で三、四日過したことが思い出されます。

尾鷲市三木里町

上岡太郎（当時39才）

当時は南輪内村外二ヶ村学校組合立黒潮青年学校の職員室にいました。校長は木本町へ校長会のため出張していて当日正午頃帰校、授業日でなかったので教練担当教師と雑談しながら関係校区出張について話しあっていた。

地震のとき特別な行動はとらなかったが、引続き何回かの余震があったので自宅の妻子の動静が心配で自宅へ帰る。津波の叫はいありとの声と校長の指示に従い重要書類をまとめ校舎に近い自宅に移転さす。津波は現在の輪内中学校をこえた中奥の田んぼまできていた。この地震で特に記憶に残っているのは、引きさがる潮と押しよせる潮の打ち合う地点は、どろ色のナイヤガラの滝そのものに感じられた。曽根・賀田の如き地形のところは、強震の場合海の色に気をつけるべきだなと感じました。

四十年近い昔の記憶をたどるといわれても細かいことはもう忘れましたが、逃げおくれた老父を助けようとされた方をみんなで引きとめられたこと、国防婦人の会合に出席された東禅寺の奥さんが津波襲来で帰途につかれたが、その途中大又官林の製材所までこられた時、津波がおしよせてきて、その時男の方があわてふためいているのを叱りつけて折柄引き潮で流れて来た丸太にすがりついて曽根の宮様の前で救助されました。賀田は海岸すじで残ったのは大勝館唯一軒でした。死者二十三人でした。

私は小学校の主席訓導の喜田勉氏と話しあって、救助本部も設置されないので、私宅に小学校のテント二張を設営しましたが、それがそのまゝ救助本部となり緊急に復旧しただ一つの電話が私の宅に設備され、空襲警報の出される毎日、昼夜をわかたず警防団長に報告しました。

こんな大きな被害に遭遇した場合、如何に立派な組織がつくられて

も真価を発揮することはむずかしいと思います。

配給米が現在の中学校附近まで流れているのを小、青雨校の生徒児童で回収しました。主として高等小学校の児童でしたが、米を講堂で乾燥させました。二日目ごろになると手を入れると米こうしがかかっていました。

尾鷲市中央町

村田勝二（当時38才）

当日は向井小学校に勤務、校庭で全校手旗信号指導中地震がぐらぐらときたので、生徒を校庭中央に集結し、全校内巡視して各児童の家庭へ班地区別に引率して帰す。向井地区は湾の側面であり海が盛り上るだけであった。津波の避難をする必要はなかった。津波のあと非常に困ったのは、市街地との交通が困難であったことで、ガンガラキを回って徒歩連絡をした。当時のことで記憶に残っていることは、

一、海の移動で単に波ではなく、引いていく時の速度と力のものすごさ、長いうなりのような地震であった。国市の松が梢だけ出ていた。

二、地震の前後など何も記憶はありません。

三、地震はうなりのようなひびきを伴ったと思う。そんな長い地震の時、大抵津波がくると言っていたのが如実にはっきりしました。

地震の後、津波がくるまで相当余裕がありました。

四、前の浜と国市の浜が、ものすごい海水の襲来で水没し押しこまれ引いていくとき、家も物も急激にさらわれた。
津波の状況はまともに見えたので、初体験でもよく判りました。
防潮堤など湾の前面のものは一たまりもないだろうと思いましたが側面のものは防御力があると思いました。

尾鷲市朝日町15-16

南崎 東海士（当時37才）

地震当日は、風邪引きで自宅で寝ていました。突然家がゆれだしたので外へ飛び出した。津波を予想したので服に着かえました。間もなく高町の方から「津波だ」と大声をたてて多数の町民が走ってきたので一緒に尾鷲小学校へまず避難しました。津波は土井周平氏宅北側の溝あたりまできたかと思います。地震津波のあと非常に困ったのは、津波の避難中現在の港町あたりが大火災だというデマが飛んで恐怖心を感じた。家族とは妻は学校勤務、母は家にいたので避難を促し、尾鷲小学校々庭まで逃げた後、夕方近く家に帰りましたが皆無事でした。

特に記憶に残っているのは地震の起った直後、近所の主婦連中が町中に集って雑談をしていたので「津波が来る」と警告したが、全然耳を傾けなかったか、そのうち青くなって避難した。

昭和十九年十二月の大地震、津波は戦時中の災害であったにもかか

わらず、いざという時の事前準備たとえば非常袋の用意などが出来ていなかった。ただ体一つで逃げただけだったが、幸い私達の区域には被害が無かったので事無きを得たが、平常の心がまえ、いわゆる「常に備えよ」ということが大事だと思いました。非常時にはつきもののデマが広がって、当時の町民に相当の不安と恐怖心を与えたことは事実である。当時は情報施設の活動も不備だったので止むを得なかったと思うが、今後もし災害が起ったときは的確なる情報を流して、市民に不安と動揺を与えないよう希望します。現在は地震と津波の関係は周知されているようであるが、当時は案外無知だったように感ぜられる。

地震と津波の関係がもっと徹底しておれば、さらに人命も救えたのではないかと思い、当時の惨害を残念に思います。当時は車がなかったので避難するにはかえって都合がよかったと思いますが、今後あのような事態が起ったとしたら、車の通行は被害に一層の拍車をかけるの

ではないかと大いに気になります。

尾鷹市谷の谷

森田賢輔（当時50才）

昭和十九年十二月七日午後一時半、午後の授業がはじまると、間もなく、突然グラグラ学校がゆれた。地震だ。相当強く、そして長かった。私は来客中だったが、ガラス戸を開けて、先にとび出し、つづいて、お客様にとび出して貰った。私はすぐ運動場の真中へとび出て叫んだ。当時は戦時下で、避難訓練が、時々行われたから、逃難といっても、めづらしいことではなかった。私は、運動場から「出よ」「早く出よ」と大きな声で叫んだが、なかなか誰も出て来ない。校舎は、おもちやのようにグラグラ揺れている。ほんとうに漫画のようであった。しばらくすると、子供が、西から、東からどやどやと走って来た。出かけたら、案外早く運動場の中央に集った。ここで私は我にかえり胸を撫でた。

子供達は、脚がすくんで階段を下れないので困ったと、口々に叫んでいた。すぐ点呼をとらせて先生に児童数の確認をしてもらい、異状なしとわかって、みんなようやく安堵した。そして次のあるまで、その場に休息させて、職員との打合せをした。先づ教頭の西尾竹雄先生に御真影を預け、二、三人の若い先生がついて新道の上の安全地へ避難してもらうことにし、他の大勢の子供達は三年生を練習してある通り、父兄に手渡しで渡すことにして、確実に父兄に教師の手から渡すことにした。そのうち、町の人達が、新道を宮の森の方から地震だと新道を上って行くのが見えた。子供達を家の人々に渡して、静かになったので、御真影の奉遷することにし、新道の西尾先生を迎えに出かけた。新道の上で御真影を受取る時、遥かに築港内がよく見えたが港内は枝木が一ぱい流れて、歩いて行けそうに見えた。

冬の日は短かく、何度か余震がつづいたが、どこからともなく学校へ避難して来るようになり、皆が寄り合い乍ら方角まい合って校内は避難

の方々が一ぱいになってしまった。
その夜も何度か余震があり、その都度、みなびくびくして校内で夜を明かしたのでした。
それにしても給食室の大事な鍵を保管している仲先生（隣の浜居住）が風邪で休んでいる時であったが、八幡山、北浦、宮の後と被害地を越えて持って来てくれたときは、大変有難かった。翌朝、職員、小使さんと相談して、避難の方々に給食用の味噌汁を接待することにした。小使室の前でお碗で立飲みしてもらったが、寒い朝の思わぬ馳走にみんな立喰みの姿は今も忘れ得ぬ景色である。尚この味噌汁について記して置くことにしよう。

一、味噌　役場給食係　故　八江遵平氏
二、魚　天満浦　高濱新次郎氏
三、味噌汁材料　冷凍庫経営　故　二郷重雄氏
四、燃料薪木　北浦町　故　山城愛之助氏

これ等はみんな、無料で提供されたものであります。時は、丁度戦時下で今振り返って見てもみんなすぐ体制がとれる位に思える。

全学年に不意打ちに行う避難訓練、各大・中・小隊旗に鼓笛隊のついた大日本青少年団訓練、通学団宮之上父兄会と組織が充分に出来ていて、今も称らしい。

学区は北浦、上川原町、堀町、野地新町、坂場で、夕方、私は私宅前の川一杯まで塩水が来てようやく助ったと連絡があったので宮前の橋まで視察し、はるかに北浦橋の様子を見て学校に帰った。翌日北浦や天福地区を見てその惨状にき入った次第である。

学校はその後一週間位は避難所に使われたが、二学族だけは一ヶ月も一教室に住んでいた。

尾鷲市天満浦

村山察道

当時は尾鷲小学校教員で地震のときは、学校で会議中でした。ガタガタときたので窓をあけて外へ出ましたが、すぐ中村山に避難しました。家族とは、学校の近くに家があったのですぐ連絡がとれた。その食糧営団の米をつんだトラックが海へ落ちた為、その浸水の米をもらって、連合町内会で炊出しをして避難民に与えた。

津波は、地震後十五分すぎた頃発生した。尾鷲神社前の橋の上に大型船が乗り上げていた程であり新町、高町、川原町、新川原町等はみんな流され、死者も多かった。

夜に入ってB29の空襲があるとの公報があり、尾鷲の人々は皆尾鷲トンネルや北山道路等へ避難した。十二月八日避難民は尾鷲小学校の雨天体操場で寝食することとなった。

私はその当時は、尾鷲連合町内会の会長として婦人会等を指揮し、炊

出し等をして疎開民を救ったが、短いものでは一週間長いものは二ヶ月間屋鳥小学校の雨天体操場で生活していた。

尾鷲市九鬼町

稲葉園治（当時36才）

地震の当日は、尾鷲小学校（上校舎）において授業中でした。グラグラと来たので生徒を机の下にもぐらして、地震がやむのをまった。そのあと地震の状況について話合をして、その後上の運動場に集合後、中村山へ避難した。

地震前の気象状況に例えば無風でどんより曇っていたとか、又些細なことでこんな変ったことに気づいたとかの記憶はありませんが、地震振動中職員室から教室まで速足でコンクリートの渡り廊下を走ったが足が地につかず走れなかったことから、揺れ止むまで一時身をひそめ揺れ止んでから避難すべきだと思った。古老の話では、地震後、津波が襲来するまでご飯を炊く位の暇があると聞いていたが、それから十五分も経たないうち（児童にそんな話をしていた）に町民が津波だと避難し始めて来たのには唖然とした。

学校にいたので、地震、津波等の前兆は何一つ感づかなかったが、後日井戸水が引いたとか、海面に異状を認めたとか聞かされました。津波の恐しさと強力な破壊力を初めて体験したその後、チリ、アリユーシャン津波も体験したが、その引き潮の強いのには驚きました。津波は旧大鵬館前あたりまできていたように思います。稲束を燃やして津波の来襲を村人に知らせた故事を想い出して震源地によって意外に早く津波が来ることを知った。

尾鷲市坂場町

七見義一（当時33才）

空襲がだんだん激しくなって来ましたので、当時私は四日市に居ましたが、仕事を止めて尾鷲へ帰って二、三日した時だったと思います。地震のときは野地新町の家におりましたが、そのとき何をしていたか記憶にありません。地震が激しくなり、ビン類が棚から落ちるので、広い場所へ避難することにして裏の川原へ逃げました。津波がくるということで尾鷲駅の西方の山へ逃げましたが、津波は北川へ来ており、まもなく家族全員帰ってきて無事を確認しました。地震の当夜は余震が次々と起りましたので、服を着たまゝすぐ飛び出せるようにして休みました。

翌日から町内会の手伝として海岸地区へ約一ケ月程出てあとかたづけをやりました。北浦の現在の橋のある所から海岸まで、まるで堤防のように家の残がいが重なり合ってひどいものでした。

津市西阿漕町岩田七の九

井上妙子（当時17才）

地震のときは職場で仕事をしており、二階におったのでゆれがひどいので、柱にもたれて静まるのを待った。落ちてきた物を片づけたりしていたが、津波が来ると聞いて逃げたが、逃げるのが遅かったのでもうすこしで死ぬところだった。実家は田川原町の中央位で全部流失してしまった。職場と実家とは割合近い方であったが、連絡もせず避難場所の屋敷で始めて母に会い、お互いに無事をよろこんだ。

子供の頃、母から昔ばなしの一つとして地震の後には津波がくるが、御飯を炊くひまがあるから、そのうち逃げればいいと聞いてました。

それぐらいのことはだれでも知っていたと思います。にもかかわらず何十人もの人が逃げ遅れて死に、私の幼友達も何人か死にました。

生れて始めて体験する大きな地震なのに、その時私は津波がくることなど少しも考えませんでした。その時一緒にいた大人達も同じ考えで

楽観的でした。ところが何だか外がさわがしく、津波がくるから逃げた方がいいと言うことで、二階からおりて玄関まで出たら、もう水がどんどん入ってきて腰までつかり、外の溝へ足をつっこみ倒れそうになりました。その時水際で大きな声で逃げろと住民に声をかけている海軍さんが、私を見て水の中に入ってきて、私をひっぱり上げてくれました。水から出た時、腰が抜けるとはこのことでしょうか、膝がガクガクすわりこんでしまいそうでした。気を取りなおし必至で走り続けました。尾鷲小学校の前まで行っても、まだ水がきているようで、後を振り向く事が出来ませんでした。知人から母が尾鷲駅にいると聞き、行ったら風呂敷包などかかえて、おびえきった顔で震えている人かたくさんいて、やっと母に会うことが出来て無事をよろこび合いました。

母から「もう家は全部流れてしまったよ」と聞いた時、始めて涙がどっと溢れてきました。家を失った人達はその夜尾鷲小学校に寝ました。

夕食に玄米のおにぎり二コと新香二片いただいた味が忘れられません。
今グラッときたらすぐ火元へ飛びます。次に出口をあける。そしてあわてず状態をみて行動します。テレビ、ラジオの情報をしっかり聞いて判断して逃げ遅れないことです。
最後に小学校にいる私共の家族を引き取ってくれた知人の親切が忘れられない一つです。これだけの親切を今私に出来るだろうか。幸な現在、何か一つでも社会の為にお返ししたいと務めて居ります。

尾鷲市九鬼町

宮崎誠一（当時28才）

地震当日は家にいました。昼食後のことで休憩しておりましたら、ガタガタときたので母がいち早く外にとび出したので、その付添いに外に出ました。津波がくるというので、戸締りして出るのが精いっぱいでした。避難は隣近所の高台の家にしましたが、津波は家の天井裏まできていました。わが部落は九鬼湾の西、字名古くて十世帯くらいの小部落だった。U字型の奥だったので津波の被害は大きかったようだ。その頃は現在の九鬼駅は遠浅だった。遅い昼食をとって帰京の準備にとりかかろうという矢先に地震、母は婚前四日目で幼い頃から地震のこわさを味っているとかで、とかく地震には敏感だった。ゆれがきたときいち早く外にとび出していった。大地のゆれる間もしっとしておらず密柑畑をあちこちするので、そのそばにぎっちり付添わざるをえなかった。大ゆれが落着いてどれほど時間があったか定かでな

いが、山仕事をしていた人が山すそから津波だと大声で叫びながら通っていった。見ると湾の入口の岬さまのところにしぶきがあがっているのがみえた。急いで家に入り戸をしめてという母の声に雨戸をしめ裏口から先ず母を避難させた。その時既に足もとに潮が来はじめていた。京都へのみやげと、もろぶたに入っていた魚のあぶりを手渡すのが精いっぱいだったろうか。みるみる潮がさーってくる。すぐ出ればよかったのだろうが、一瞬そこから出るのをためらった。そして反対側から出ようとして硝子戸に手をかけたが、びくとも動かない。潮はどんどん増えてくる。部屋の中で一呼吸、二呼吸、そのとき幸いにも硝子戸が一枚ふわりとあいた。そこから上げ潮にのって泳いだ。自分がこないので家にいてくれた人々の顔、若者がさし出してくれた棒をもち高台にかけあがったことだった。着がえのために上の母屋の納屋まで行く。その途中の上の家への連絡橋は、既になく川の石がたいに行った。着がえおわって納屋から見た光景、三波、四波ごとに下の家は棟

近くまで潮がくる。ひき潮の海は、現駅前の埋立地のもっと先まで干あがって海底がみえる。海ぞいにあった数戸の建物は、すっかり流失していた。

田海道の一住人が半じて屋根上ににげられたのであろう。親子三人（子供は二才だったろうか）しかっとよりそい、湾内を波のままに漂い助けを求めていた声は、いまなお忘れられない。舟のない部落からは、どうすることもできなかった。やがて町からの救助船に無事助けられたときの安堵、余震の続く第一夜、高台の無事の家で被災者たちかまんしりともせず夜をあかした。その後幾日か、その家と自分の家の母屋とで分散して共同生活をした。

もともとまだ電燈のついてない部落だったので、停電にはさしてふしゆうを感じなかった。一夜あけた夜は澄んでいた。ぬれた畳を干しているとき、飛行雲鮮かな一機、あれがB29だとはそのとき思いもおよばなかった。

家、天井は見事に破損、建具も若干流失やら破損。金庫が玄関先一間ぐらいのところに、泥に半分埋って無事だったことも印象深い。食料のことは特に記憶にないが、京都の家内の実家から父が代表して食料やら日用品を持って、八鬼山越えで被災見舞にかけつけてくれたことは、実にありがたくうれしいことだった。

尾鷲市北浦町（当時新町）

北村道生

当時は戦争の末期で食糧事情は一番大変なころで、そのころから学校給食が始まったようにように思う。それは現在のようなものでなく、せめて子供にはご飯を食べさせようということで一椀一汁であったが、米はなく昼食は、米ぬかをまるめて小判形にして焼するのが主食であった。

私は小学校五年生で昼過ぎて、家に帰えりつくなり地震がゆれてきた。煙草の陳列棚がいくつも置いてあったが、それが倒れてくるので恐ろしかったが、そこで何とか揺れるのをしのいだ。母は大きな声で悲鳴をあげていた。弟らは幼稚園へ行っておったので、迎えに高木タバコ店、清水眼科のところを走って行ったら、今の幼稚園のところで二人に会った。それで二人をつれて今の郵便局（旧町病院）のところまできたとき、石垣のおばさんがちょうど家に帰すのと会ったので、あず

かり三人をつれて家に帰るべく内山病院のところまで来たとき、何人かのお婆さんがつくなっとるのに出会った。お婆さんらは座にもたれてハーハーいっているので、僕はびっくりしてどうーたんと聞いたら自分達のことはいわずに、あんたら何処へ行くんと言うので、家に帰えると言ったら、今帰ってもあかん、津波がくるで逃げなあかんといわれて、始めて津波を知った。

その時、僕は国語の教材にっ稲村の火」と言うのがあって、それを思い出した。それでこれは大変やと言うことで、今度は三人をつれて逃げることになったが、何処へ逃げてよいかわからないので、どんどん上へ逃げた。

今の高校グランドの入口に防空壕があって、そこまで逃げたら沢山の人が壕の中に座っていた。そこで夕方まで過して家族と連絡をとるため下ったが清水眼科のところまできたとき、警防団の人が立っておって浜の方へはそこから入れてくれなくて、尾小の講堂へつれていってく

れた。そこは避難した人達でごったかえしており、母を捜し出すことが出来なかった。三人の子供は寝てしまうし、座り込んでいたら母もあっちこっち捜しておったのだと思うが、あんたら何処へ行っとったんと声をかけられたときは、恐怖心にかられ、母にしがみついて泣いた。暗い天井の低い講堂は、足のふみ場もないくらいで、一晩過ごしてあくる日に家に帰えった。新町は米屋の前あたりから、ごみがいっぱいで入れない状況で、二階までも流木がうまっていた。それを越えて二階から家に入ることが出来た。家は流れなかったが、一階部分は三〇度ぐらい傾いて、裏にあった借家は全部流れた。波は一メートル三〇センチぐらいのところまできたが、二階は浸らなかった。

翌日流木をあらけていたら、飛行機が白い線を引いて飛んでいるのを見て敵機がやられて、今すぐ落ちると漁夫の人が言っていたのをおぼえている。

その年は屋島湾で鰯の大漁があったのか、キンカン箱の中に鰯のにぼ

しがいっぱいつまっていた。岸壁は旧缶詰工場の前だけ残ったが、あとは市場まで全滅して、それにうなぎはわいて一日に六～八匹ぐらいづつ釣った。水産試験場の前の岸壁は、石積であったが崩れなかったか、コンクリート造りの岸壁は崩れていた。

当時中学校の月謝は四円五十銭、映画は四十五銭で、大盛座、東宝劇場があったが、大劇館はなかった。タバコは配給であったが、マッチも一本づつの割当で配った。

経験上から、当時は避難所も決められていなかったこともあって、親との連絡もなかなかとれなかったが、今は避難所も決められているので、その点の心配はないか、各自が学区域から認識しておるかと言うことである。避難場所を住民に徹底させるには、一斉に訓練をやると言うのも一つの方法ではないか、例えば今までの避難訓練は防災の日に係から逃げてくるものであるか、子供達はウイークデーの昼間であれば、学校におるので子供と親が確実に連絡のとれる避難場所を定め

て避難訓練をくり返し、くり返しやれば、そのことを認識させることが出来ると思うし、パニック状態をおさえる一方法である。

学校としては、地震の際は校庭内へ避難させて、地震がおさまってから集団下校、学校内解散をさせるか親に渡すことは考えていない。学校で解散することは、このような非常時において、避難場所の決められていない状態では危険ではないかと思う。

尾鷲市港町

笠松　栄（当時14才）

地震の時はねんざーして学校を休んで家にいたか、北川ぞいに菓子店があり、その前に左官屋があって、そこで遊んでいた。大きな地震やったな。家の中で地震の終るのを待ってすぐ自宅に帰えってみると、おばあさんが干してあった麦がまかったんやいうて拾いよるし、ちょっと浜へ行って来るよ云うて浜へ行って見たら、すごかったな、台風の波のようにゴーゴー鳴ってきて、それを見ておったらほかの人は、津波や何んやいうて騒動してきたんで、そんなり家に帰えって妹をおんで吉ちゃの方へ逃げた。そーたらすでに北川の橋はつかってきていた。川は水が増えてきていた。私のおじいさんらは神へ出ていて、古里の前あたりで地震にあい前の石堤防に船をつけて話をーしている間に堤防はつかってきたので、そんなり逃げたと言っていた。

私は北川の橋のところから新道をのぼって寺山の上に出て、そこから

津波を見ていたら、波は乳屋の前の田圃へあがり小型の船が避病院の下のところまできておった。その晩は坂場のおばさんの家で世話になり、その後は知人宅でいろいろ世話になった。

津波の状況は天気の悪るい時と同じで、波が白くなっておりかぶさってきた。このへんの人達は家内中逃げるので、道路がヤーヤみたいに混雑した。逃げるときは、家族とは別々であったが避難場所でいっしょになった。

昔から地震から津波までの間はご飯を炊くまがあると聞いておったがそんな時間はなかったように思う。当時のことで思い出すのは、シラミがわいたことで、風呂屋でうつってくるのか、それはものすごかった。ランニングシャツはシラミの卵でいっぱいやった。あくる日、流された船を捜しに行ったが、弁財のところでみつけた。キツネ目をつんでおったがそのままであった。

尾鷲市小川町（当時北町）

宇利　貞

当日は、古戸の妹の家から米を出すさかいに、足袋をこしらえてくれんかなとたのまれたので、自宅の二階でミシンがけをしておった。地震がよってきたので、下におりなあかんということで段階をかけおりた。子供達には何か出かけ知らせたのか遊びに行ったらあかんと言うて、表にむしろをひいてそこで遊んでいたので、そのまま子供をつれて中村山へ避難した。

家の前のおじさんには先に逃げると言っておいたが、おじさんはあとに残っていて逃げるときには、波は胸までできておって二階へ上り屋根づたいに逃げたそうです。津波がくると言う知らせは、浜の方からおめいてきたが、それはまた大きい地震が来ると言う人、津波がくると言う人があった。

前の家のお婆さんらはサイロ網が岳詰工場のところに船をつけておっ

て、網からサンマをはずしていたとき、地震がよってきて、海岸は地割をしていたので網の上に止るまで乗っていたと聞いている。

津波のあと自宅へ帰えったが、家の中はどうにもならんようになっていた。自宅の前に三軒借家があったが、それが私の家の小屋根にかぶさっておった。北町は私のところの前まで流れて、隣の家は残ったが波は入口の上の敷居まで来ていた。家の中にはリヤカーが入っている54し、ドラム缶はいくつも入っていた。逃げるとき、戸を開けて逃げよと言うので表も裏も開けはなして逃げたので、家は流れなんだんやろう。

津波のあと古戸の小倉さんのところへ一週間ばかりおいてもらって、その後学校の前の姉の家で過ごした。その姉は、この津波で死んだ。私の姉は魚売をしておって、学校の前にいたので浜へ出てこなくてもよいのに、市場のところにいただき、納屋があって、そこへハカリを忘れてきたので、それをとりに行ったのだと思う。

ハカリを持ったまゝ私の家の軒下で死んでいた。
近所の人で死んだ人もあったが、大きな荷物をおいぬて死んでいたが一度逃げて荷物をとりにもどって、逃げ遅れ死んだように思う。
当時は食べものに困って、今の工業高校のところへさつまいもをもらいに行ったが、いもはよい方でつるや葉を食べた。救援物資をもらったが、子供は小さいので学生服のやぶれたものばかりで、なんにもならなんだ。
地震から津波までかなり時間があると聞いていたが、流れた人の中には荷物をまとめていた人もあったんやろな。
私の家には海軍さんが二階に泊っていたが、二階のものは津波で流れなかったが、津波のあと泥棒が入って海軍さんのものが盗まれてしまった。

尾鷲市天満浦字長浜

上田楠平（86才）

地震は午後一時半頃やったかいな、丁度休んでいて道具の整備をしておったときで、外へとび出した。地震があんまりひどいので下駄をはくひまがなく、足袋はだしで走った。

外に出てみると皆浜に出ていたが、私はなにかなしに感じるところがあって、家内に地震のあと何かおこるかもわからないから、大事なものをリュックサックに入れてあったので上にあげておけよと言って、私と弟は海を見に行ったら、丁度汐が吹いてきて、堤防の口（当時は天満よりのところが航路となって堤防がつながっていなかった）から漁夫でいう面場といってごみのかたまりがすーと入って来た。サア津波やというので私は町中におめいて走った。子供を先に捜してつれて裏山へ逃がした。現在の景井さん宅のところから海をみていたら、一回目の波が引いたときに荷物をとうに下におりると言う人もあったがおろさ

なかった。

波が堤防を越すときは、ナイヤガラ瀑布のようであった。波が引いていくとき、矢の川の方から流れてきた筏に四人のっていたが、流れるのが早かった。津波のあと家に帰えったら、タンスもなにもかもひっくりかえっておった。浪は天井まできていて、一丈五、六尺あったやろ。舟を流したので捜しに行ったが、佐波留の中からずーと南の方へ流れていて、水の入っていない舟は、三木崎沖まで連なっていた。自分の舟を捜すのに他の舟や流木をわけもていったが、自分の舟はないし、三木崎を西に見るところまで行ったが、戦争中のことで、潜航艇に攻撃されたらいけないので、早田に入りそーて九鬼口に入った。そーたら二隻みつけたがついに私の舟はみつからなかった。そのまま帰えってきたら私の舟は築港へつないでくれてあった。それは矢の川より筏で流れた人達がみつけて私の舟に乗りうつって、新町のところへつけてくれてあった。

私は地震のとき逃げるときは、かならず定のともをつけるなと皆んなに言うている。つまさきで跳べ、それやったら走れる。それは何故かと言うと、足袋の新調を穿いていたので汚すといけないのでつまさきで走ったら走れた。地震のあと津波がくるとは知らなかった。何十年に一回やで、私のおじいさんの話では、地震から津波までの間はご緒を炊いて食べる間があったから、おちつけといわれていた。地盤は強いのか地震で家が倒れることはなかった。大きなゆれはなく、小さくゆれた。屋根の上の平木がギッチギッチと鳴って昼間が出来た。体験から地震の際は新しい家であれば大丈夫であるか、古い家は急いで外に出るようにしたらよい。

長浜では死者はなかったが、天満で三名死亡した。死んだ人は、避難するのにその方向を間違ったようです。それは裏山へ逃げればよいのに海岸に沿うて逃げてやられて、一方、一度逃げておいて物をとりに行って二度目の波にやられたが、あれは欲を出したんやろな。物を捜

していて家ごと奥へやられた。又、大黒館へ映画をみにいっておって長浜向けて逃げたが、我が家まで到着しないうちに水がきたもんで、北村タバコ店のところに桜の木があってそれにつかまって助った。一人は海軍の集会所のようなところがあって、そこの番をしていたが映画館からそこまで走って帰えったが、大事なものがあるのでそれをもって出ようとしたが、すでに波に追われているので逃げられず、表の部屋で死んでいた。

雲南市大浦脇浜

松崎ふみ（旧姓仲、当時32才）

当時宮之上小で先生をしておったが、風邪をひいて休んでいた。二階で寝ていたがなかなかひどい地震で、二階からおりるのにヨタヨターいもておりた。父はこんな大きな地震のときはあと津波が恐いので、母に避難するときは御飯を一釜炊いておけといって海に気を配っていたが、御飯を炊くひまなんかなかった。海がへんやから逃げるように言うて、父は兄夫妻の子供をみに長浜へ行ったが、汐鼻まで行ったが長浜までは行けなかったそうです。そんなり小林さんの缶詰会社の間を山へ逃げたそうです。私達も裏山へ勝手口より逃げて母親と二人で夢中でした。

私は学校を休んでいたので、津波がおわったあと一度学校をみに行かなあかんと思い学校へ行きましたが、八幡山から北浦にかけて通行出来ないので、山の裾の方を通って行った。

当時は毎日ではないが給食をやっておってその係をしていた。家は海岸ぞいに位置しておったので、津波は二階で三尺つかりました。家は流れずに残ったが、一階にあった家具は流れてしまった。一晩隣の家で泊ってあくる晩から家に帰って生活した。二階の畳は浸き上ってそのまま沈んだ形になっているので、それを乾燥して使用した。一階は家具等全部流失したので、テントで柱をかこって風を防いで生活した。

地震のことについて教えられていたのは、身軽にして逃げたらよいと言うことですが、死んだ人は一度は逃げたが、大丈夫やと言うことで荷物をとりに行ってやられたと聞いている。津波のあと物を洗うのに古里の川まで行って洗っていた。飲水は山水をひいてあったので、それを飲んでいたように思う。今でしたら断水やなにかで困るのではないかと思う。

尾鷲市港町

岩崎桃枝（当時44才）

昼食をすまーてホットーていたとき、地震がよってきて、しばらくの間待っておったが長いこと揺れるので、これはあかんと思い外を見たら、用水桶は木の樽でおいてあったが、水が町へ流れ出ーて何も残っていなかった。八幡神社の近くに福光製材があってあそこへ逃げていた。地震がやむのを待っておって、やんでから帰ってきいよったら八幡山の橋は木でつくってあったが、真中にひびが入っていた。橋の近くに日吉丸と言う二階建の家があって棟瓦がはずれていた。家に帰ってきて話をーておったら、地震のあとは津波が来ると言うので、家で逃げる用意をしていたら浜の方から津波や早よ逃げよと言ってきたので、そんなり一番先に真すぐに新道へ逃げた。

波は夜からもこもこと湧いてきてそれを見たら、恐ろしくなって、終夜も寝られなかった。

逃げるとき、中井の橋まできたら、橋の際まで水が来ていた。逃げ遅れた人は膝まで水につかったと言っていた。地震がよってからご飯を炊いて食べてから逃げたらよいと聞いていたが、その時は早かった。川原町と新川原町の間の人がようけ死んだように思う。川原町は全部流れて私達も親類の家に二～三日おいてもらって、その後収容所、中岡病院があってそれが借家になっていたので、それを借りてバラックが建設へ20年4月頃）されるまで住んでいた。当時は食物がなかったので毎日配給をもらいに行っていた。地震のあと、予震があるので海の近くの人は毎日逃げていた。

尾鷲市港町8の5
明慶治也

地震当日は松阪陸運が元警察の前に事務所をもいてあって、そこの次長をやっておった。その日は天気がよくて、昼頃やったと思うが木材の輸送で国市の工場で材木の運搬をしておったが、それについていた。食事のあとやったかいな、その時おこったんです。国市の事務所の建物はダンスをしているように揺れていた。尾鷲の街の方をみたら土煙がどっとあがっておった。地震が終るなり自動車でいったん事務所まで来て、家を見に来たんです。家についたら津波がくるという声が出たので、これは大変ということで、子供が幼稚園を上に四人いたので何も持たずに一番先に逃げた。私の聞いている昔からの話は、津波は地震がおこってからご飯を炊いて食べてゆっくりしてから来るというのを聞いておった。

昔の地震は震源地が遠かったので、あいがあったと思うが今度のはそ

うではなかった。津波はタンスの引出し二段目ぐらいまで来ておった。津波が来るのを折橋から見ていたら、海の水が中川を逆流してくるのが見えた。以前は田んぼで、ひくなっていたので全部灌水した。その時写真機を持っていたらと思ったが戦争中のことで持てなかった。避難したあと事務所があいていたので、しばらくの間そこに泊った。車庫が今の田尻商店のところにあって自動車三台入っていたが、それは皆流っていた。そのあとへ舟が入っていた。

電気はつかなかったのでローソクを使っていた。水は海水が井戸に入っていたので使用出来なかった。

子供達の話では足袋も何もはかずに逃げた。それだけ津波の来るのが早やかったと思う。

尾鷲市大字南浦小久兵衛谷

矢浜令美（当時19才）

当時は尾小で助教諭をしておって、昼ご飯を食べて同僚と話をしていたとき突然地震がよってきた。先づ地震が揺ってきたら入口を開けんと家が傾いて出られなくなると常々言われていたので、先づ職員室の入口をガアーと大急ぎで開けた。学校は窓ガラスが多いのでその揺れる音がこわかった。そのあと運動場へ出て、逃げるのは根の張っている竹藪へ逃げようと言うことで、他の先生と手をつないで竹藪へ逃げた。

その時学校の前の二階建の家が崩れてくるようにものすごいいきおいで揺れていて、その家に近づかんようにして道端を通っていった。竹藪に入ったときには、地震もおさまっていて、中村山へ写生に行ったった五年生の子供達は中村山が割れてきよったと言って帰ってきた。その後職員室へ入って行ったら机の上は赤、青のインキでぬってと

それを片付けて便所へ行ったが、恐ろーさで足ががクがクーて座れなかった。そのようにしている間に下の方へ（港の方）から津波やと言ってようけ逃げてくるので、中村山へ登ったら、三回目の波がやってくるところで、堤防の下の石が見えるといいよったら沖の方から真赤な赤土をぬったような波がワワーリワーリときてアッと言う間に堤防もみえなくなってしまって、そのときいた警備船は堤防の上をブイをつけたままグルグルまいよって、川原町を舟が反対になって艫を先にして尾鷲神社の方へ上って行くのを見た。

山の上でも皆んながワーツ家が流れていくと言う泣き声がすごかったので私もつられて泣いた。津波も終って下へ下ってきたら、ゆりなおしと言うのか、それがどんどんくるし新川原町、川原町、知古町が皆やられた。五平屋の裏にあった二階建の家は一階をやられて、二階がどんと下りおりてその屋根の上を通って行かんなん状態であった。自宅は小久兵衛谷にあったので町中は通行できないので尾鷲神社の方へ

坂場から入って、神社の裏を通って西山田を通って墓の下に出て家に帰った。

北浦の天理のところで沢山の人が死んでいるということで気持が悪かった。私のところの本家は、昔の製氷会社のとなりにあったが、自分の家の船が流れついて、こわれた形になっていたが本家は残ったんやけど下はどろの海でお勝手の戸棚がわかやの隣の土井さんの角へ流れておって拾ってきた。隠居は新川原町の端にあったんで一番先に流れてズーと押していった形やもんで、一番上に乗っていた。

尾鷲小学校でも児童が三～四人死亡した。

地震から津波までの時間はかなりあったように思う。巡航船も尾鷲港は津波やと言うので沖で待機していたが、タライの水のように静かであったそうです。

自宅は今の谷口牛乳屋の上の方にあったので被害はなかったが、下の方の人が逃げてきたんで自分の家のものを出してお世話をした。

かわいそうやったのは、生徒が家と家にはさまれて死亡していた。三年生の子供が父の位牌をカバンに入れてお母さんを捜す。お母さんは子供を捜しているうちに家の壁と壁にはさまれていた。

西等科のこもそうやった。その日は午後早引きしていったんやけど、オーイ・オーイと手を上げるのでどうしたんと言うたら、早引きしたくそと手をふって、なぜ早引きするんやといったら、用事があるんやっていった。

一度昼ご飯を食べていたんで、お父さんがえんといってお父さんを捜しに行って、お父さんも子供を捜していて二人とも死亡した。増福のあとお母さんは子供がおらんと言って学校へ捜しに来たので、手をふって帰って行ったと話をしたら寺へ行ったんやろか、中村山やろか八幡やろかと捜していた。私は互に捜し合うことは危険やと思うのではり逃げるときは別々に逃げて、避難場所は決めておけばそうあってることはないと思う。

今だに地震がよったらドアを開けよと親から教えられているので、地震がよったら丈夫な物の下へ、そこに空間が出来て助かることがある。外へ逃げたときは竹藪へということが頭の中に残っている。うちの隣居の隣の人なんか地震がよってから海へ見に行けと行ったら海はえらい引いていたんで、えらいこっちゃっんで家財道具をまとめて、お婆ちゃんをつれてきいよったら波は腰までつかってきてひよいっと後をみたらお婆ちゃんはいなかったといっていた。波に流されて死んだ人はたいてい、一回目の津波のあと波が引いたので、これでもう助かれたと、とりにもどって死んだように思う。

物は大事やと思うけど命あっての物種というか、物をとりに帰ったりせん方が良いなあと思う。落着くところを決めておいて互にそこに逃げるということ、欲を出さないこと、常から口すっぱく親からいわれたその教えが私はよかったと思う。

屋鷹市矢浜

相賀徳一（当時37才）

今の新見世のところに検見舎というのがあって、そこで地震の時事務員が二十八人ぐらい働いていた。地震がやってきたので、そこの地震やと言うので皆外へ出ていて自分は部屋の中にいたら、部屋の壁がザアーと落ちて来たので、これはいかんと言うので私も外へ飛び出した。事務所の前は十字路になっていたので、皆そこにかたまっておった。

地震がえらいので事務員を皆、家に帰えらしてから、自分の家も見ておかないかんと思い自転車で帰えって再度事務所に戻ろうとしたが津波がやってきて行けなかった。

津波で矢ノ川の水と中川の水が矢浜のところでうっちやいして丸の足場丸太が矢浜の入口にうちやかったんで、道路はピシャと止められた。十分ぐらいか、しばらくしてから山本朝吉さんに会ったら、お

れたのばばは流かされたと言うので、わしや消防団やったもんで、団員を呼ばなあかんので半鐘へのぼりよったら、流されたと言うばあやんはトコトコやって来た。なんどれ、ばあやん、お前は流れておらんていうので、おれは半鐘を打ちに上がったんやかいていうようなことさ。しっかりした九十ぐらいの人でした。

安政の津波は、自分の生家でとまっていたと聞いているので、そこでしっとしておったといいよった。津波は今の公民館の前で、矢ノ川と中川の波が打ち合いした。公民館敷地までつかった。公民館前の橋は汐受橋というか、わしら子供の時分は秋の大潮のとき大水がでるとうぐいかのぼってきて釣ったことがある。

タバコ屋からお寺にかけて名古という名古は湾のいきづまったところを言うので、そこまで汐が来ておったんやろ。港田の山西のおやじが夫妻で流かされたと言うんで、それはほっとけんと言うんで捜しに行った。北浦にあった地方事務所のとこは行けいで山の方を廻って行っ

た。

津波は矢ノ川では橋ノ口まで入っている。今度目あれだけの津波がきたらガンガラキのずっと奥まで行くで。

国市でベカに角材を積んでいた人は流かされて沖の方に行ったり、ガンガラキの方まで行ったのを見た。

波は二回目は一番大きいように思った。半鐘の上から見いよったら、しゃもをだいて飛んできたのがあった。牛を追ってくるのがいた。今の二ュー三紀のとこは牛でいっぱいになった。牛をそうすると七代たたると言うのでだいじにしたもんです。大地震のあとの余震は恐ろしかった。夜は大曽根の上から向井の上の峠が火の帯になるんき。松と松との葉が地震のときにこすりあって火が出るんやと聞いた。それが火の木と言う。

食糧はなくて困った。昭和十六年頃よりだんだんえろなってきていた。会社へ行くのに弁当はみなサツマイモやった。

米を持っているのは、おれだけやった。助では津波は花屋のところまで、新屋敷の前はドラム缶でいっぱいやった。矢浜の下地の辺は津波は、なかった。

尾鷲市矢浜

北村勝三（当時77才）

あーら中学校の寄宿舎が焚物がたらんというので焚物を作るのに下谷へなぜ切りに行っておった。午後一時頃やったんかいな、時計をふてたったんさ、ホッと時計をみようとくしたらないんさ、時計をふたったげえーと言ったら、拾たらしまわーてくれるかいと言んで、しまわーてやるって言うたんさ、金やんは拾ろとったんかどうか知らんが大分ばかりーたらあったて言うんさ、まあーまいやのと言うんで、おおしまいやと言うて下へおりて来たんさ、めーを飲べるとこを茶か場て言うわい、そこへ来たと思ったら地震がよってきたんさ、えらいもんな、おるとこないもんやな、場所の良いところに茶か場かあるんやけど、石が動いて弁当を肩にかけたなり木にしがみついて、まだかいなまだかいなと思いよるんさ、なかなか永かった。地震がやむまでの間、石が一つ大きなのがまくれて来た。その石は今でもそこにある

が、そこへむけてでにを持った人がやってきてびっくりした。その人はめしらのとこへとんできた。他の連中はどうなったかわからんし、帰る準備をしていたら中学生は焚物をとりにきたんさ、学校はどんなになっているかわからんのですぐ帰えーた。私はしばらくの間そこにいて人夫の帰えりをまっていた。それから川を渡って新道まで出たら向井の連中は自転車でビューと走っていったが百米もいかんうちに引き帰えしてきた、なんどれて言うたら、津波て言うのはあんなんかい。な、樋ノ口までいっぱいやがい、それからわーも走った。野田の由まで走った、そーたら、追うてきた牛がどっさりおるんさ、津波を見たら腰が抜けたと言うのか走れなんだ。そんなり自宅まで来たら家内はおらんのさ、自分の家には被害はなかったけど津波で流されたワラのとりあいが始まった。これではどうにもならんと言うので警防団が出てワラを全部分けたが、それに警防団が一日かかりでやった。翌日、高三さんと二人で残りのワラを集めて皆にクジを引かして分け

た。そないにしているうち国市から流れた死体の検視をせよという連絡があり二人で行った。住所は新田で国市においてやられた。造船所で缶を焼いていた人でした。

尾鷲市矢浜下地

岡善十郎（当時40才）

わしらぶゆさんとあかまはだの立木を国市へ運んでいた。その日はぬくたかった。おらと上衣もぬいで国市へ置いて立木をおろーたら、ななめになった。それで梶子をこねよと思って丸太へ乗って棒をつっこんだらがタンと落ちたんさ、これは地震のゆれやったんさ、これは危いと言うので、ぶゆさんはそんなり家へ行くし、おれは地の端を通って家へ行くと家の棟はがサッと落ちているし、家の中へは入れなんだ。その時、庄七、忠七、㋭のおやしさんが来てくれて、これはあかん入れんのうと言うて、津波はくるんじゃないかいとおんしゃんに聞いたら、津波の来るときは御飯を炊いて食べて逃げられるぐらいの時間はあるっ言うので、そうこうーっているうち㋭のおんしゃんが相賀哲さんのお父さんが忘れたか津波やでとおめいてきた。それで第一回目の波が来たがあまり大きくなかった。サッサッサッときた。

大和から送ってもらった正月用のもち米一斗と米二升を入れてあったブリキ缶を持とうとしたが、弁当箱は持っているし、梯子のこを持っているやろ、尺がねを手でつかんでいるので持てなかった。あわてこんでおったので、子供らに裾ノ口へ逃げって言うたが、めしは裾ノ口へ行ったら子供らは中学校へ行ったと言うし、何処まで津波は来るもんかわからんし、津波のあと家に帰えったら家はがシヤとなっているし、裏はウナギの池で石垣がくえたんで波で家がやられていた。為やんは千石船で二百石の板を積んで入ってきておったが、くるっと回されてどうにもならんので、そんなり為やんはそれに乗って港の方へ出て行った。二回目入って来て松の木へ登って波が引いて下りたら松の木はみなこかった。津波で家は流されて家の建っていたところは淵になっていた。津波の晩はやいちおじ宅に泊めてもらいその後半年ばかり高二さん宅に泊めてもらった。

家内は多いし、家を建てる大工さんがなかった。個人的に大工さんを

中川はずっと奥までも波が来ていると思うか、矢ノ川は岩神の奥までできているし、樋ノ口の下までもきていた。岡崎の橋の下に大きな石油タンクがあった。二百石くらいの舟が二隻上っていた。わらの中にススキが沢山入っておった。当時は地震や津波のことは皆知らなかったが、地震がよったとき、千代太おじは津波がくるとおめいていたそうです。矢浜の人は中学校、桂山、神社へ逃げた。安政の津波が矢浜でここまできたと言う石があって打止めと言う石がおいてある。

屠蘇市大浜

野田高二（当時30才）

検目をやっていて製材所の中におって、あれは一時二十分か三十分頃やったと思う。八ッ時前で女の人はお茶を沸していた㊙工場でも本台、小割とあってわしらは永谷為やんと二人で責任をもって女の人は五～六人で小割の方におった。地震がよってきたので、永谷に地震やかいと言うて永谷は前に出てくるし、わしや裏に柿の木があってそれにしがみついた。ほしやけど、これではあかんと言うことで、前に塀があったのでそれに入り込んだ。ぐるぐる回ってくるし、どうしようもなかった。

今の田中製材のとなりにあいちおじさんとせつおじさんとおって、津波はきやへんかいと聞いたら津波はきやへんやろと言うたが、わしやそんなり母親をみに自宅へ行った。家におったもんで津波はひよっとしたらくるかわからんので、早よ逃げいと言うておいて、工場へもどってき

榎本　しずか（当時23才）

納屋において地震がきたので五分ぐらいして子供が曽根へ行っておったんで曽根へ走ったんです。すでに小浜橋へ来たら沖はさざなみが立っておって、曽根に着く途中で波が来て田んぼへかも上った。目の前でながれていく家が深みへ沈んで行くのが見えた。日が暮れるまで山におって向いの山を廻って奥へまわって質田へ帰ってきました。地震がよって津波がくるまでずい分短かったように思います。地震がゆってからすぐ曽根へ向って走ったから、その時すでに波が立っていたので質田の場合、津波が来るのが早かったように思う。私とこの妹は農協へ勤めていたが、友人二人は流れて死ぬし、その子は自分の家に老人がいたので大きな地震がきたら津波があるぞと聞いていたのでそやもんでその子は自分の受持ちの書類を持って逃げ、友達にも津波が来るさかいに逃げよらいと言うのにその人達は信用せん

とおって二人とも流されて死ぬし、うちの妹は逃げて助った。同じ
ここにおってでも、老人がおって聞いておった子は助るし。

尾鷲市賀田町

木下ふさ子（当時28才）

私の経験からすると地震から津波までの間は、時間があったように思った。あの時分寄合があって、まなとかねぎをとれくらい作っているのか聞いてくれんかと言うので調べに行っておったが、その時地震がよってきて家と家が地震にゆれてひっつくように見えた。寺のところへ逃げてみよったらこえをかついで置いてあったのが、地震でペッチャンペッチャンとあふれて、地震がやんでから高台から下へおりていって子供をおんで裏へ逃げておったら大川幸次郎さんと言う人が津波やぞとおめいてきた。二十分くらいあったのではないかと思う。それで寺へ逃げてみていたら引き汐と満汐とかふつかって汐が高く上ってその汐の高さは寺のところまで来るように思った。

尾鷲市須田町

芝田まち

当時私は名古屋にいたのですが、母から聞かされたところによると今の保育所の上に私のところの田んぼがあったのですが、そこで母が仕事をしていたら地震がよってきたので、これは大きいわと言うので跳んで家に帰ってきた。

井戸のポンプを押したらスカスカと言って水が上がってこないので、これはえらい、あかんと言うので父が足が悪かったので、父を逃がさなあかんと言って逃げたのでそんなに早くはなかったように思う。名古屋にいたときのことは、防空壕で各戸に防火水槽がおいてあって毎朝水をいっぱいに入れてあったか、地震のあと外に出てみたら道は川のように水びたしになっていて一つぱいに入れてあった防火水槽の

水はからっぽになっていた。家の近所の寺の灯籠は倒れていてそれはひどくいたものであった。

尾鷲市賀田町

杉下なお子（当時30才）

昼食を食べて畑に行っておったのですが、そーたら地震がよってきたんですが、段々畑やもんで石垣が積んである。石が地震で力千力千と音をたてていたが、その音は何とも言いようのない音やった。その石の音にびっくりーて家へすぐ帰った。そーてみたら家はどうもなっていないし、しばらくすると津波やと言う声で逃げて見ていたら農協のところで荷物をもって逃げていた人がおったが、波になかされていくのを見て手を出ーたらとどくぐらいであったがよう助けられなかった。

尾鷲市賀田町

上　広　好　治（当時36才）

当日は前夜から朝にかけて雨が降って寒かったように思う。天候はあまりよくはなかったが高曇りで地震の前ちょうと思われる事件は起らなかったように思う。私は地震のとき三木里と古江の中間のところにおって地震が起るなり賀田へ向って走った。

古江へきたとは、第一波が終って第二波がくるところであったか、家などが倒れておりその間をぬって走ったが、途中海を見たがひき潮とおし潮が賀田湾のところで波がぶつかって、波が大きくたちあがってそれは滝のようになっていた。曽根に行っておった人は賀田へ走ってきたようですが、橋のところで波にのまれて死んだようです。

尾鷲市賀田町

中島示夫（当時29才）

当時は朝から寒かった。地震よってから津波がくるまでである程度時間があるのであわてず何をおいても逃げることである。昔の人は地震がよってから津波が来るまでの間、めしをたいている時間があるとかされていたが、そんな時間などなかった。あの時、津波から逃げるのに道を賀田奥の方へ逃げた人は死亡しており途中から高台へ逃げた人は助かっている。地震から津波までの時間は十分ぐらいであったように思う。

尾鷲市賀田町

榎本繁弘（当時37才）

父から聞かされていたが、昭和十九年の地震のあった三～四年前からふしぎな地震がひんぱんにあったので、何かあるかわからないから注意をしておけと言われていた。家にいたので地震があったあと浜に出て海水の状況をみていたが何ら変化はなかった。そして家に帰って避難をする準備をしていたが、そうこうしている間に津波がくるぞと言う声がしたので高台に逃げた。第一波でみな逃げたようであるが第二波がくる前に物を取りにもどって死んだ人がようけおった。

当時の波の高さは、賀田駅とか町内の電柱にしるしをつけてある。又波の先端は賀田奥の坂が上りかけのところまで行った。